

Nakamura Masanori

中村正軌

教皇の手文庫

文藝春秋

教皇の手文庫

中村正軌

Nakamura Masamori

文藝春秋

著者略歴

中村正軌（なかむら・まさのり）

1928（昭和3）年、旧満洲撫順に生れる。

'52年に学習院大学を卒業。日本航空在勤中の

'80年にデビュー作『元首の謀叛』で第84回直

木賞を受賞。他の著書に『貧者の核爆弾』『ア

リスの消えた日』『四つの聖痕』がある。

教皇の手文庫

一九九八年六月三十日第一刷

著者 中村正軌 なかむら まさのり

発行者 和田 宏

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三二二三
電話 〇三（三二六五）一二二一

郵便番号 一〇二一八〇〇八

本文印刷 理想社
付物印刷 大日本印刷
製本 矢嶋製本

定価はカバーに表示してあります。
落丁・乱丁の場合は小社営業部にて送料
当社負担でお取り替えいたします。

© Masanori Nakamura 1998

Printed in Japan

ISBN 4-16-317810-4

教皇の手文庫／目次

プロローグ

1 『地下墓洞の守護者たち』

2 金髪の男

3 ヴァチカン市国情報機関「プロ・デオ」

4 ナカウラ司祭の一週間

5 『ネズミの通り道』

6 聖書のセールスマン（火曜日・水曜日）

7 目出し帽の若者たち（木曜日・金曜日）

8 ワシントンDC

9 サン・イシドロ教会

10 南半球のジャニコロの丘

11 クエルボの死

エピローグ

5

8

31

43

62

105

134

148

189

247

306

361

378

装
丁
鹤
丈
一

教皇の手文庫

プロローグ

一九四三年の十月というところだ、ドイツ、ソ連のポーランド侵攻にはじまった第二次世界大戦がちょうど五年目に入ったところだ。

この月も終わりに近付いた二十七日水曜日の深夜、ポルトガルの首都リスボンの西二十六キロメートルにある海辺の村エストリルの沖合に、煌々とした光の群れが寄り集まっていた。

二時間ばかりまえにエストリルから出漁した十数艘の小型漁船が、それぞれ左右の船端に集魚灯をぶら下げて、イカ釣り漁に精を出しているのだ。

ポーランドにはじまった戦火は、英国を含む全欧州へとたちまち燃え広がったが、ポルトガル政府は、火の粉が自国に降り懸かる寸前、中立を宣言した。

とはいえ、それ以後も、米欧間の航空中継基地を自国領アゾレス諸島に建設する件で米国と秘密協約を結んだり、英国には、リスボン、ポルト両港での潜水艦など小型戦闘艦へのひそかな給油につき、暗黙の了解を与えたりしていた。

こうした姿勢からして、ポルトガルがどのがわに肩入れしているかは当初からはっきりしていたが、賢明な彼らは、ドイツの継戦能力に明らかな陰りが現れはじめても、依然として中立宣言を撤回しなかった。

こうしたわけで、この国の漁船だけは、ぎらぎらと輝く集魚灯を点けたまま大戦下の夜の大西洋

洋へ出漁できたのだ。

ポルトガル漁船が大手を振って外洋漁労に励んでいたこの一九四三年だが、イタリアでは、二十年間首相の座にあったムッソリーニが七月二十四日に失脚し、その四十日後の九月三日、後を承けたバドリオ政権は連合国がわに降伏した。

連合国の第五軍と第八軍がシチリア島を征圧しおえたのは、その半月まえの八月十七日だった。ローマを次の標的にして、イタリア半島の南端カラブリアに上陸した彼らは、ドイツ南欧軍を駆逐しつつ東西兩岸を北上しはじめた。そして、十月一日には、チレジア海がわのナポリを占領、アドリア海がわでは、ガルガノ半島付け根の要衝テリモリまで北進した。

大戦の形勢にもはや逆転なしとみたバドリオ政権は、十月十三日、つい一月まえまでその一員だった、ドイツ・イタリア・日本による、いわゆる三国同盟を破棄し、ドイツに対して宣戦布告した。

この段階でも、ドイツはなおまだ強大な戦力を残していた。とはいえ、主要な戦線のいたるところで守勢に転じざるをえなくなり始めていた。

こうした形勢が日ごとに強まるにつけ、ドイツ側のだれもが、胸中にふと涌きあがる懸念、つまり、四分の一世紀まえ、第一次世界大戦ですでに味わったあの敗北が再来するかもしれない懸念を、きっぱりと打ち消しきれなくなりだしたのがこの時期だ。

同じころ、ヴァチカン市国も、自身の将来に危惧を抱きはじめていた。なにしろ、独立と主権を具備する市国なる地位は、イタリア首相ムッソリーニの勢威があつてこそ、国際的に認知されたのだ。ところが、そのムッソリーニはいまや放逐され、彼の率いたファシズム・イタリアは崩

壊した。

となると、戦後の国際政治の風向き次第では、かつての姿に、つまり、ただの宗教本山の地位に突き戻されることもありうべしと、彼らは憂慮しはじめた。

言うまでもなく、この時点では、大戦が終わっていくらもたたぬうちに、いわゆる冷戦が、アメリカとソ連のあいだではじまるのを予測する者などいなかった。

ましてや、その結果、なにごとにつけソ連と張り合うという建前から、アメリカが、ヴァチカンを庇護する立場を堅持してくれるなどと、だれ一人予測できるはずもなかったからだ。

というわけで、ドイツとヴァチカンが、到来する可能性の強まった最悪の事態に備え、まえもって打てる手は打っておくべしと、まるで申し合わせたように動きだしたのがこのころだった。

1 『地下墓洞の守護者たち』
ザ・ガーディアンズ・オブ・ザ・カタコーム

日付が十月二十八日木曜日に変わって一時間ばかりすぎたころ、どの船の魚倉もイカで溢れかえっていた。豊漁に満ちたエストリル村の漁師たちはたがい引き揚げの合図を交わし、各自の船端を昼間なみに明るくしていた集魚灯を消した。

ペドロ・アルメイダと二人の息子の乗る十五トン半の船も、舳先を陸地のほうへ廻しはしたが、漁具の後始末にてこずっているふうだった。

こいつをかたづけなけりゃ船足も上げられぬ、といったそぶりで僚船をすべてやり過ごしたその船は、やがて漂うのをやめて舳先を沖へ向けなおし、速度を上げた。

十分もすると、目になじんだエストリル村の灯さえ、ときたまの大波の背に乗ったときにしか見えぬところになった。船は、集魚灯をとびとびに四個点けると、エンジンの回転を落として周回しはじめた。

二、三分がすぎた。船首のやや右手、百四、五十メートル彼方の海面が沸き立つように盛り上がり、たちまち白く千々に砕けた。巨体から海水を揺すり落としつつ現れたのは、鉛色をしたUボートだった。

操舵室正面ガラス窓のうえの壁面に、電気系統制御箱と無線機が天井に押し付けられるようにしてネジ留めされている。制御箱の防水蓋を跳ね上げたペドロは、集魚灯をつぎつぎに消し、箱

の脇の鉤釘からつかみ取ったイアフォーンを着けた。コードは無線機とつながっている。

無線機のセルロイド製周波数円盤に真新しい引つ掻き疵がある。昨夜乗船するや、ペドロが親指の爪で付けたものだ。その疵が赤い基線と重なるまで円盤が回されると空電音がザーッと入りだしたが、二、三十秒で止んだ。

と、ポルトガル語でもドイツ語でもない、耳なれぬ言葉がイアフォーンを震わせ、数秒の沈黙のあとまた繰り返された。

ペドロには判った。雇い主から、あらかじめ教えられていたからだ。それは、
「地下墓洞の守護者たちに幸いあれ」

と唱えるラテン語だった。

無線機のマイクを口元へ引き付けたペドロは、応答の言葉を同じく二度言い送った。昨日の午後、雇い主の書斎で百回も唱えて丸覚えさせられたラテン語だ。

「われらが神の御代の御栄えを。われらが神の御代の御栄えを」

一、二分後、ドイツ人のと思われる角ばったポルトガル語が呼び掛けてきた。

「遠路の出迎えを深く感謝する。本艦の左舷に着船されたし」

Uボートに向けて舵輪を操作するペドロの目に、司令塔上につきつぎに現れる十ばかりの人影が見えた。司令塔外がわのタラップを真っ先に滑り降りた三つの影が、浮上戦闘用に前甲板に立つ七十五ミリ・クルップ速射砲へ走った。取り付いたとみるや、彼らは砲架のロックピンを抜き、防水栓を外した砲口をペドロの立つ操舵室にぴたりと向けた。接近してゆく小型漁船になんらかの謀計が秘められていたときの備えだ。

別の水兵たちが、左舷の艦腹に、巨大ソーセージのようなオレンジ色の護舷具を四本垂らした。

そこへ横付けすべく数メートルまで近付き、船体をUボートに平行させると、先端にゴム玉の付いたロープが船首と船尾へ投げられた。待ち受けていた息子たちがそれらを繋船金具に巻き付けて引き絞り、自船をUボートに固定した。

フッド付きで丈の長い真つ黒なゴム引き雨合羽を着込んだ二つの影が、司令塔の陰の闇から歩み出た。

水兵の手に援けられ、彼らがペドロの船に乗り移るとき、使い込まれた正帽から艦長とみられる士官が、先を歩む男に挙手の礼をしてなにごとか言った。イアフォーンを着けたままのペドロの耳が拾ったのは、「將軍閣下」と呼び掛けたドイツ語だけだった。

たがいに緊縛を解いたのち、Uボートはその場でふたたび海中に没し、ペドロの船はエストリル漁港へと全速で飛ばしはじめた。ただし、入港するまえに、村の西はずれの崖下にある岩場に立ち寄った。

波が打ち寄せるたびに大小の玉石ががらがらと鳴る水際で、ペドロの末息子が待機していた。すぐうえの兄の漕ぐゴムボートで、二人の男が運ばれてきた。手を貸して彼らを磯辺の岩に引き上げた末息子には、先に立って急な小径を登っていった。崖うえのスペイン松の林のなかに、荷台に幌のかかった小型トラックが隠してあるのだ。

エストリルは、住民の数からすればごく小さな漁村だが、海沿いの南斜面には、英国人など外国人の所有する高級別荘が連なる。その関係で、テニス・コートやゴルフ場はもとより、レガッタ・コースさえ近辺に設けられており、休暇シーズンには小規模ながらカジノまで開かれる。

南のほう、すなわち、海と太陽のほうを向く凹面鏡、といった天然地形ゆえに、冬場の平均気

温が摂氏十二度を下らない。くわえて、リスボン国際空港からは三十数キロメートルの国道一本という足場のよさもあり、手頃なリゾートとして古くから国外へも聞こえた土地なのだ。

こんなわけで、大多数の村人の生計が漁業とリゾート関連の仕事に依存しているため、両者が海浜地帯を分け合う村の南部に人口のほとんどが集中している。

例外はある。ペドロ・アルメイダの雇い主、フランシスコ・マヌエル・デ・ロボの、村の面積の六分の一を占める広大な屋敷は、北部の山裾一带に広がる。

コルクの生産では、何世紀にもわたり常に五指に入っている一族、デ・ロボ家の敷地は、即、コルク櫟の植林地なのだ。

その真ん中に建つ、赤みがかった砂岩ブロック積み of 三階建ては、植林地の全般を見渡せる望楼をほぼ中央に備えており、海のほうからの眺めはまるで常緑の森に聳える城塞だ。

客人の出迎えをペドロに命じた日の夜、フランシスコ・マヌエル・デ・ロボは寝に就かずに、この館の三階にある書斎で読書に耽っていた。

大きなマホガニー机の真向かいの壁際に、背丈二メートルを超える壁時計が立っている。オレンジの実よりやや大きい、ぴかぴかの真鍮球をゆったりと左右に振るそれは、ページをめくる乾いた音しか聞こえぬ静寂のなか、パツツ、パツツと、歯切れよく時を刻んでいる。まるで、大木のでっぺんから落ちてきた雨垂れが、岩肌に当たって弾け散る音のようだ。

時がたち、かなり長い前奏メロディーのあと、時鐘が低く重く三つ鳴った。デ・ロボは後退した髪が入り江をなす頭をもたげ、半月眼鏡の縁を避けて上目使いに壁時計を見た。垂直の長針に対し短針が直角を作っている。

しおり代わりのユーカリの葉を読みかけのページに挟んで書物を閉じ、眼鏡の銀の蔓を両耳か

ら外した彼は、椅子を後ろへずらして立ち上がった。

「わずかなりと予想外のなにかが起こったら、まずわたしの意見をたたけ、といっておいたのに、ペドロめ、ついになに一つ聞いてこなかったな」

疎外されて拗ねた子供のようにつぶやいた彼は、左手の壁面をほとんど覆いつくす書架へ目をやった。目の高さの棚の左はしで、今宵一度も呼び掛けてこなかった漁業無線機が通電ランプを赤く灯らせている。

へま、それも、ことがすんなりと運んだ証拠。なんの横槍も入らなかったのも神の御加護と、むしろ感謝すべきであろくな」

部屋を出て廊下の角をいくつか曲がった彼は、建物の中心部を四角く占める、望楼階段室のまえにきた。

鍵束をじゃらつかせぬようにして扉を開け、壁の内側へ習慣的に手を伸ばす。だが、電灯スウィッチに触れる寸前その動きを止めた。

へこんな時刻に、望楼の小窓から光が漏れたりしないほうがいいな」

おかげで、展望室への石段を登るにも、それらの小窓から射し込む夜空の明るみを頼りにするしかなかった。

ようやくのことであえまで登りつめた彼に、夏場より格段に乾燥した海風が心地よかった。南の窓辺に立つと、おぼろおぼろした夜景のなかで、七、八メートル下に広がる代赭色の瓦屋根だけがはっきりと見えた。

へあの下で、五大陸からやってきた十人の客人が眠っている。昨夜の年次総会第一日は延々深更におよんだ。みなそれぞれ長旅のあとでもあり、横になるなり眠りに落ちたことだろう」

瓦屋根を離れた視線は、小型トラックの姿を求めて南の方角をさまよった。十一人目、すなわち、ただ一人未着の客人がようやく到着する。

へ二十七、八の両日が年次総会、したがって、二十六日火曜日までにおいでねがいたしと、全員にかなりの時間的余裕をもって通知した。

ところが、なんと、二つしかない議題の一つを発議したご当人が、開会に間に合わなかった。不文律とはいえ、総会は全結社員の出席をもって成立する、との決まりがある。が、しかし、隣国へ出かけるのもままならぬ当節の世情からしてやむをえなかうと、昨夜はこれに背いて開会したわけだが

中立政策下のポルトガルの場合、外国人の出入りが比較的容易とみられている。それゆえ、デ・ロボが、昨年にひきつづき、総会場の提供と年次当番とを引き受けさせられたのだった。そんなわけで、総会が無事に終了し、客人がすっかり去ってしまうまで、昨年同様、彼の頭の中を占めるのは結社に関することばかりだし、遅参の仲間の到着をいまや遅しと待っているこの瞬間などはなおさらだ。

へ昨夜論議した第一議題は、教皇^{げいか}猥下が、さきごろわが結社に下されたご諮問そのものだった。猥下のこのご諮問は、年次当番のわたしにフォンチ家の長子を通じて齎^{もたら}されたが、猥下とわが結社とのあいだはフォンチ一族の男子が取り持つ、との不文律にしたがってのことだそうだ。

教団永代長老家の一つフォンチ家の始祖が、結社創設の際の立役者の一人だったゆえ、以来、同家の者がこの重責を担うことになったとか。だが、この謂れの真偽のほどもいまさら確かめようがない。

いまとなつては淵源までたどりえぬ、こうした仕来りや不文律、あるいは、謂れや決まりが、

わが結社には数限りなくある。ま、草創を千数百年の昔に遡るものとしてはいたしかたないのかもしれない。

とはいえ、仕来りや謂れの淵源はさておいても、結社の起こりについてだけはもうすこしはっきりとした定説が望まれるのだが……

一説には、結社「地下墓洞ザ・ガイ・ディ・ア・ス・オフ・ザ・カ・ク・コムの守護者たち」は、かの暴君ネロによる「紀元六四年のキリスト教徒大迫害」の時期、つまり、ヴァチカンの丘の闘技場で、教徒が猛獣と素手で闘わされたりしたあの窮境の時期に、教徒を匿うことを目的に結成された、という。

また、他の説では、紀元三〇三年の春にはじまり約八年間つづいた、ディオクレティアヌス帝による、いわゆる「キリスト教徒、最後の大迫害」のおり、教徒の生命を守るのみならず、信仰を護りとおすことをも目的に結成された、とされる。

四世紀初頭の「地下墓洞カ・ク・コム」は、キリスト教徒の墓所にとどまらず、教徒の隠れ家、集会所、そして、祭儀の場ともなっていた。したがって、「地下墓洞の守護」が、教徒の生命の保護はもちろん、教団や教義の護持をも意味したとしても、決して不自然ではなく、そのまま、現在の結社のあり方とも合致する。

へ……したがって、わたしはこの説のほうを支持するが、これとて、定説か通説か、あるいはただの俗説か、と問われれば、返事に窮する。確とした裏付けになる事実など、なに一つ伝えられていないからだ。

考えに耽り、漠然と夜空を眺めていたデ・ロボは我にかえり、トラックが登ってくるはずの、南のほうへ視野をすばめた。それらしき動きはない。

中部ヨーロッパは、ドイツがどうか支配下に置いているとはいえ、いまや、その周囲を数倍